

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32616

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770248

研究課題名(和文)江淮地区楚文化の研究：漢帝国成立の文化的背景

研究課題名(英文) A Study of Chu Culture in Jianghuai : The Cultural Background of the Birth of the Han Dynasty

研究代表者

太田 麻衣子(Ota, Maiko)

国士舘大学・文学部・講師

研究者番号：10713547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では長江下流域から出土した「戦国楚墓」「楚国の墓」とされる墓を再検討し、それらの中には越や淮夷の文化を色濃く継承した墓や秦文化の要素を含む秦漢時代に造営された墓も多いことを証明した。その成果と文献の記述を照らし合わせてみると、楚文化は春秋時代には当地に伝播していたものの、楚の実効支配や楚人の移住は、従来の認識よりも遅く、戦国後期になってようやく本格化したものと考えられる。漢建国の功労者達の多くは当地の出身であるが、本研究により彼らのルーツが戦国楚に限らず多様であったことが明らかとなり、彼らが出自は多様でも楚文化に淵源を持つ文化を共有していたことが漢帝国の成立には重要であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：Upon further research on tombs considered as “Chu tombs in Warring States period” or “tombs of Chu state” excavated from lower ChangJiang River, this study has revealed that there are many tombs which inherited the culture of Yue and Huaiyi or ones built during the Qin Han period. It has been conventionally considered that Chu culture was propagated to the area during the Spring and Autumn period, however, comparing the results with the descriptions of literatures, effective control by Chu and immigration of Chu people are now considered to be much later, in late Warring States period. Most of the contributors to the establishment of the Han Dynasty are from this area and this study has revealed that their roots are not only Chu in Warring States period, but also various ones, sharing the same culture of origin in Chu. Therefore, it can be concluded that the one culture mainly originated in Chu culture, played an important rule to unify China as the Han Dynasty.

研究分野：中国古代史 先秦史

キーワード：楚 楚墓 楚式墓 越 淮夷 楚漢戦争 漢帝国

1. 研究開始当初の背景

「漢民族」や「漢字」に代表されるように、現在の中国にも大きく影響を及ぼしている漢という古代帝国は、従来の研究では「楚人」が中心となって樹立したものだと考えられており、漢の建国に先立つ秦の滅亡についても、「楚人」のナショナリズムと関連づけて語られることがあった。しかし、その「楚人」の実体については戦国時代の楚と単純に結びつけられるばかりで、具体的に検討されてはこなかった。

漢以前の国家が皆、西周ないしはそれ以前に遡る伝統を標榜した国家であるのに対し、漢はそうした伝統を持たない、既存の国別や貴種性を打破した、まったく新しいかたちの国家である。そうした国家がこの時点で誕生し得た理由を明らかにするためには、戦国時代に多数存在していた諸国家のうち、ある一国のナショナリズムに着目するよりも、むしろ既存の国家という枠組みに拘泥しない人びとの存在にこそ着目するべきではないか。

また、楚は戦国後期に、秦の侵略によって、春秋戦国と長きにわたり本拠地としてきた江漢地区を喪失し、江淮地区へと拠点を移しているのだが、それによる変化は、領域だけにとどまらず、社会的・政治的にも変革が起きていたことがすでに指摘されている。にもかかわらず、従来の研究ではそうした変化・変革が取りざたされることはなく、江漢地区に栄えた楚と、秦末漢初に「楚」の勢力として江淮地区に挙兵した人びとを、無条件に同一視してきた。戦国後期の楚に起きた領域・社会・政治各方面における変化を明らかにしなければ、秦末に「楚」の勢力として挙兵し、秦を滅ぼし漢を樹立した人びとの実体を明らかにすることはできないのではないか。

本研究は、このような問題意識のもとに出発したものである。

2. 研究の目的

「楚人」が中心となって漢帝国を樹立したとする従来の見解に問題があることは上述のとおりだが、さらに報告者は本研究に先立つ論文において、漢の高祖である劉邦が、単純に楚人とはいえない人物であること、かれ自身も自分のルーツを秦・晋・魏・楚に求めていることを明らかにしている。

しかしながら、劉邦をはじめとする漢建国の功労者たちが、みな一様に楚文化を好み、楚文化に慣れ親しんでいたことは、文献資料の随所に確認できることである。また、考古資料の分析からも、漢代に楚文化が流行していたことはすでに指摘されており、それが漢建国の功労者たちが「楚人」とみなされる一因にもなってきた。

そこで本研究では、漢のように既存の国別や貴種性を打破した新しい国家がこの時点で誕生した背景には、出自を超えた均質な文化の共有が必要不可欠であったのではない

かと考え、それを立証すべく、秦末における「楚」が戦国時代の楚と無条件に同一視されるものではないこと、しかしながら、その一方で楚文化に淵源を持つ文化を共有していたことを立証しようとした。

3. 研究の方法

戦国時代の中国については史料的制約が大きく、文献資料だけでは判然としない部分が多い。そのため、本研究では文献資料と考古資料を併用しつつ、双方に矛盾しない結論を導き出すことを試みた。

また、本研究に関わる先行研究においては、不十分な文献の記述にもとづく推測にすぎない「歴史的経緯」に、考古資料の年代や属別などの判断が左右されることが多く、あたかも考古資料が文献資料に従属して扱われるような節があった。そのため、本研究では考古資料の分析をまず主体とし、それをもとに断片的な文献の記述の整合性を図ることで、当時の状況を復元することを試みた。

主な史料として用いたのは、『史記』をはじめとする文献資料のほか、長江・淮河・錢塘江下流域から出土した戦国秦漢墓である。研究開始当初は、戦国墓を中心に研究を行っていたが、研究を進めていくうちに、戦国後期墓の分析には、秦漢墓を参照する必要があることに気がついた。

4. 研究成果

(1) 淮河の下流に位置する江蘇省淮安市から出土した運河村一号戦国墓は、従来「楚国の墓」とされ、楚が戦国中期には当地に支配を及ぼしていた証左とされてきた。しかし、本研究では同墓が「楚国の墓」とされてきた論拠には誤りが多く、むしろ在地の文化のほうの色濃く残っていること、また、越文化の影響もなお見られることを明らかにすることで、同墓が「楚国の墓」といえる墓ではないことを立証した。

(2) 従来の認識では、楚は戦国中期には淮河下流域にまで支配を拡大していたと考えられており、在地の支配者層が葬られている運河村一号戦国墓を「楚国の墓」とみること、その証左としてきた。しかし本研究では、(1)で示したように、同墓が「楚国の墓」ではなく、在地の文化を色濃く残した墓であることから、同墓造営当時の淮安は、在地の淮夷によって治められていたことを指摘した。くわえて、そうした状況と文献の記述とを照らし合わせることにより、戦国中期にはまだ楚は淮安に実効支配を確立できておらず、淮河と長江を繋ぐ運河も制御下におけてはいなかったことを明らかにした。

また、運河の要衝として古来より栄えてきた淮安の立地を踏まえてみても、同墓が造営された当時の淮安は、対立し合う楚・越のどちらか片方に与していたとみるよりは、楚・越の双方に通じていた可能性のほうが高い

だろうことを指摘した。

(3) 漢帝国の樹立に貢献した漢三傑のひとりである韓信が、運河村一号戦国墓が出土した淮安の出身であることから、(1)(2)の成果をもとに断片的な文献の記述を読み解くことで、かれが劉邦と同様に純粹には楚人とはいえない人物であること、しかしながら、楚文化には慣れ親しんでいた人物であったことを指摘した。これにより、出自を異にする人びとが楚文化に淵源を持つ文化を共有していたこと、そうした人びとが中心となって漢帝国を樹立したことの一端を明らかにした。

(4) もともと呉越の地であった江浙地区では、越が呉を滅ぼした後はもっぱら越墓が造営されるばかりであったが、戦国後期になると「楚墓」が造営されるようになる。このことについて、従来の研究では江浙地区出土の越墓はすべて戦国中期までに造営されたものであって、戦国後期以降には楚式の墓制や副葬品が全面的に越地の伝統にとってかわり、越の伝統的な器物は漢初にふたたび出現するようになるまで消失したと考えられてきた。しかし本研究では、浙江省杭州市の半山より、戦国時代から漢代にまでわたる越墓が出土していることに着目し、さらに、文献の記述からも秦の統一直前まで越の勢力が江浙地区に残存していたことが確認できることから、楚が江浙地区に進出して以降もなお越の勢力が江浙地区には残存していたこと、钱塘江流域以南はとくに越の地であったことを指摘した。

(5) 江浙地区から出土した「楚墓」とされる墓のなかには、実際には秦系の副葬品を持つものがあることを実証した。とくに、浙江省余姚市から出土した老虎山一号墩一四号墓に副葬されていた灰釉陶器の鼎は、従来、材質は越文化に特徴的な灰釉陶器でありながらも、器形は楚系のものであるとして、楚・越の文化要素が融合したものだと考えられてきたが、本研究ではこれが秦系の鼎を模したものであり、とくに江漢地区で前漢前期に生産された秦系の鼎によく似ていることを明らかにした。

また、上海市青浦区の福泉山二号墓からは、肩部に「呉市」のスタンプが捺された秦系の罐が出土していることから、前二二二年に秦が当地に会稽郡を設置して以降、当地でも秦系の土器が生産されていったことが窺える。江浙地区出土「楚墓」の下葬年代は、一般に戦国後期に比定されてきたが、以上のことから、本研究では、秦系土器が副葬されていた「楚墓」の下葬年代は、前二二二年、すなわちほぼ秦代以降にまでくだることを指摘した。

(6) 江浙地区に関する文献の記述はきわめ

て断片的であり、従来は楚が前四世紀に越王無疆を殺害して以降は楚が江浙地区を支配していたものと考えられてきた。しかしながら、(5)の成果にもとづくと、現在までに発見されている江浙地区出土「楚墓」には、下葬年代が秦代以降にまでくだるものが多く、したがって楚人が江浙地区に移住し、当地を直接支配するようになった時期は、従来の認識よりも実際には遅かったものと考えられる。

本研究では、そうした考古資料にもとづく分析と、文献の記述との整合性を図ることで、楚人の江浙地区への移住や楚の実効支配が本格化したのは、前二四八年に当地に封建された春申君の江東進出以降だったとみるのがもっとも妥当であることを明らかにした。また、(4)の成果をもとに、江浙地区内でも楚人の移住や支配の程度には地域差があり、钱塘江流域以南まで楚が直接支配していたわけではなかったことを指摘した。

(7) 春申君が江浙地区に天下各地から人材を集めていたことを伝える文献の記述や、(4)(5)(6)の成果から、秦末の江浙地区には、古くから当地に住んでいる越人や、戦国後期に移住してきた楚人、春申君によって天下各地から集められた人びと、また会稽郡の設置やそれに続く秦の統一に伴い移住してきた人びとなど、様々な出自を持つ人びとが居住していたことを明らかにした。

江浙地区からは秦末に項羽が「江東の子弟八千人」を率いて挙兵しており、項羽自身が代々楚将を務めた家系の出であることも手伝って、従来の認識では、「江東の子弟八千人」もまた、先入的に「楚人」とみなされてきた。しかし、本研究では、かれらがこのように出自が多様な人びとのなかから集められていたことを明らかにすることで、項羽の率いた「江東の子弟八千人」が、春秋戦国にわたって江漢地区に栄えてきた楚とは一線を画す存在であることを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

太田麻衣子、韓信故里からみた楚の東漸：江蘇淮安市運河村一号戦国墓の検証を中心に、史林、査読有、第 98 巻第 2 号、2015、pp. 354-387

太田麻衣子、江浙地区出土「楚墓」の再検討 - 楚の江東進出との関わりから -、日本秦漢史研究、査読有、第 18 号、2017、pp. 1-29

〔学会発表〕(計 2 件)

太田麻衣子、江浙地区出土戦国秦漢墓の様相：楚の江東進出との関わりから、第 28 回日本秦漢史学会大会、2016 年 11 月 19 日

太田麻衣子、楚の江東進出と春申君：項羽
の率いた江東の子弟八千人との関わりから、
第 66 回東北中国学会、2017 年 5 月 27 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 麻衣子 (OTA, Maiko)

国土館大学・文学部・講師

研究者番号：10713547